

スゲはヒメジユズスゲを中間としてタマツリスゲに続くものであるが、葉にかなりの差の有る事、分布がヒメジユズスゲと稍々離れて居る事から亞種と考えた。又、*C. sparsinux*に就いては Franchet の記載 (Les Carex de l'Asie Orientale 中) によく一致する支那産の標本 (御江博士採品) が科学博物館に1枚あり、之が日本の唯一の標本でもある。

2. 1951年に Nelmes 博士が発表した新節 Sect. Scleriiculmes (サツマスゲ節——新称) にアカネスゲが編入されるべき事を述べた。

3. 昨年科学博物館集報に発表した新種リウキウタチスゲを再録した。

4. 従来同一種内に置かれて居たコゴメスゲとナキリスゲは果胞の形態と栄養体の形態との双方から区別する事が出来、別種として扱われて居たセンダイスゲが、其の区別点である小穂の数と苞枝の形態にナキリスゲとの中間を生じて区別がむづかしくなり、むしろナキリスゲの変種と考えた方が自然である。しかし命名規約上はナキリスゲがセンドライスゲの変種の形になる。ナキリスゲ類の研究に供した資料の中には名古屋の井波一雄氏に負ふ所大なるものが多い。

○ヤマドリゼンマイとオニゼンマイ (前川文夫・金井弘夫) Fumio MAEKAWA & Hiroo KANAI: Clear demarcation in sterile fronds of two *Osmunda*.

ヤマドリゼンマイ (*O. cinnamomea* L.) とオニゼンマイ (*O. Claytoniana* L.) とはブナ帶上部から亜高山帯の濕原及び水位の高い原野や斜面に普通のだけで、屢々群落を作り且つ混生する。その種の区別は前者が裸実両葉に分れて生ずるのに後者は胞子囊を中部の数段の羽片上にのみ着ける点にあることは知れわたつている。しかし胞子葉は常にあるとは限らないし両者の混生は適格な種の区別に悩みの種である。

一昨夏私の教室の野外実習で日光地方に数日を送つたが、この両種の裸葉における区別には悩まされた。そこで学生の金井君と実葉を伴つて株を規準にしてあれこれと区別をさがして次の二点を得日光の隨處で試みてみると仲々工合がよいので、まずは適格なものとみて次に記す。

ヤマドリゼンマイ

- (1) 最下羽片の外方最下小羽片の形 隣りの小羽片と較べて不連続的に小形となるか又は往々欠けて空隙となる。従つて羽片の輪廓は根本で急にへこむ

オニゼンマイ

- 隣りの小羽片と殆んど同大同形、従つて羽片輪廓は出入がない

- (2) 羽片の裏面の色 鮮綠色、白味を帯びない

- どこか蒼白色を帯びる

- (1) は確実だが、(2) は時々蒼白味のないオニゼンマイにぶつかりやや不確実。一般に云うぜんまい綿の色の栗褐色と淡紫褐色による区別は殆んど区別に使えない。